



トヨタ財団レポート

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

〒163-0437 東京都新宿区西新宿2-1-1

新宿三井ビル37F

Phone: 03-3344-1701(代)

Fax: 03-3342-6911

URL <http://www.toyotafound.or.jp>

No.94

Jan. 2001

スダ百科事典出版によせて

アイップ・ロシディ



インドネシアの成り立ち

インドネシアが世界一広い島国であることは、周知のことであるが、あまり意識されていない。仮にインドネシアをヨーロッパの地図にあてはめると、その広さはイギリスからバルカン半島まで、そしてポーランドからイタリアにまで及ぶ。また、インドネシアには東部時間、中部時間、西部時間と、アメリカと同様に3つの時間帯がある。つまりインドネシアを東から西へ、あるいはその逆に横切るとは、単に地理的な移動だけでなく、時間をも隔てることでもある。

13,000以上もの島々からなるインドネシア そのうち、人が住んでいるのは3,000ほどだけであるが、その住民は、それぞれ異なる文化と歴史を持つ様々な民族集団⁽¹⁾から形成されている。現在までの専門家による調査によると、500種以上もの地方語が存在するという。一方で彼らは何世紀にもわたり、共通語(リンガフランカ)としてムラコ語を会得してきたのであった。そのムラコ語が、1928年の青年の誓いで⁽²⁾インドネシア語と名付けられ、統一語あるいは国民語とされたのに続き1945年の憲法で正式に国語とされた。

地方語と総称される500種以上の言語を使用する人々の生活状況もまた一様でない。もしインドネシア中を旅行すれば、人類の歴史上の様々な文明レベルを垣間見ることになるであろう。すべての最新電化製品を使う現代的な生活をしている人々もいれば、石器時代

の生活をしている人々もあり、そしてその中間の生活をしている人々もいる。インドネシアには、この島々の元々の住民以外にも、紀元前あるいは紀元初期に中国大陸やインドでの騒乱や災難から逃れて移民としてやって来た人々も多数存在する。世界の交通の十字路に位置したため、その後もインド、中国だけでなく、アラブからも商人の往来があり、それぞれの文化や宗教がもたらされたのである。

戦乱によってアジア大陸からの香料の入手が困難となったために、ヨーロッパで香料危機が発生し、ヨーロッパ人は15世紀末以降、生産地への直接的ルートを模索し始めた。そこが当時、大陸にはさまれて位置していることを意味する「ヌサントラ」と呼ばれていたインドネシアの島々であった。それから、ポルトガル、スペイン、イギリス、オランダの商人たちの貿易競争が激化し、最終的には東インド会社に結集したオランダ商人たちが勝利を得ることになった。彼らは貿易をするだけにとどまらず、カトリック(スペイン)とプロテスタント(オランダ)のキリスト教を布教し、その一方で自ら設立した学校を通じて西洋文化を紹介した。1798年に東インド会社が解散したため、その権限はオランダ政府に引き継がれ、1800年以降オランダ政府が現在のインドネシアを「オランダ領東インドネシア」として植民地支配した。第二次世界大戦で日本軍が彼らを敗北させ、植民地支配者になりかかったものの、日本は連合軍に降伏し、1945年8月17日にインドネシア民族は独立宣言をしたのである。

文化の多様性と政治的統一

文化の多様性という点では、インドネシアは非常に豊かである。国章には、異なってもひとつという意味の「ピネカ・トゥンガール・イカ(多様性の中の統一)」というモットーが記されている。「ひとつ」とは、その多様性が統一国家およびインドネシア民族として結合されているという意味である。例えば、インドネシア語

はこの島国すべてをひとつにまとめるための紐帯になる。彼らは、自分自身をひとつの民族、つまりインドネシア民族であると自覚している。いくつものエスニックグループがひとつにまとまることによってインドネシア民族となるのだが、それを形成するグループは民族集団である。このことばはインドネシア民族が多くの民族集団から形成されていることを表現している。それはエスニックと言うよりもむしろ文化や言語によって規定されることが多い。ただ、それぞれの文化や言語が異なるので、それぞれジャワ、スンダ、マドゥラ民族集団とされる。一方で、エスニシティの側面から見ると彼らの相違はない。しかし、彼らの言語や文化が異なるためにそれぞれジャワ、スンダ、マドゥラ民族集団と呼ばれているが、以前は、彼らはジャワ、スンダ、マドゥラ民族と自ら呼び、またそう呼ばれていた。

19世紀以来、多くのオランダ人官吏や学者が、インドネシアにおける数々の民族集団の文化、とりわけ言語と文学について研究してきた。そしてその研究成果は、非常に豊富な知的財産となっている。彼らの大学には「インドロギー」という科目があった。それはインドネシアに何らかの形で関係があることのすべてについての学問であり、主に植民地に送られる官吏候補生を養成するためのものであった。つまり、第一の目的は、彼らのインドネシアへの支配を永遠のものとするのであった。

インドネシアが主権を有する独立国となったとき、インドネシア民族の視野に基づいた歴史を自らの手で書き直さなければならないという意識が芽生えはじめた。なぜならオランダ人学者による歴史や研究の

成果はすべて、植民地支配者としての自らの重要性を反映させていたからであった。とはいえ、1945年以来次々と発生する政治的社会的騒乱のために、インドネシア国民はいまだに国史の編纂と国民教育のための適切な指針となるべきものを見つけないでいる。地方の文化と国民文化を互いに結びつける基本的な政策も同様である。なぜなら、政治的事件の影響から、「単一と統一」を掲げる中央政府は、地方性のあるものに疑念を抱いたからである。国家の指導者側は、たえず「単一と統一」がもろく壊れやすいものだという過剰な不安をもちあわせており、地方性が感じられるものすべてに関して不信感を抱き、インドネシアを混乱状態におとし入れる破壊分子として捉えていた。このことは、政治指導者が文化および、民族と国家における文化の役割に関する認識が不足しており、また十分に理解していなかったためでもある。

このような背景から、インドネシアの地方文化を研究しようとする具体的な行動がなされなかった。政府自体にこの問題への関心がなく、まして計画的で継続的な行動はとられなかった。ゆえに、地方の言語と文化を保護し発展させるという政府の義務が憲法（第32条、第36条および解説部分）で明言されているにもかかわらず、地方文化の復興と発展はその社会だけの責任とされた。

インドネシアという国が形成されて以来半世紀にわたり、さまざまな地域で、何年にもわたる情勢不安といった、社会的・政治的事件がしばしば発生し、精巧な技術を伴った先進国の経済支配を通じて、グローバル化の影響を受け、多くの地方文化の習慣や信仰、芸術、口承伝統などが失われていった。このような伝

統文化の喪失は、遅々としたものであるため、すぐには実感されないが、長期的には確実に進行しているのである。

スンダの文化を伝えるため

インドネシアで二番目に人口の多いスンダ人として生まれ育った者として、私はスンダ人の文化や信仰をも含む風俗習慣が時とともに失われていくのをこの眼で見てきた。そして若い世代に限らず、スンダ人自身が祖先の残した文化の多くを知らなくなっていることも見てきた。彼ら自身さえ、スンダ人の歴史は国史に関する書物の中でごくわずかにしか取り上げられておらず、歴史を知らない。どういうわけか、オランダ人研究者のスンダの歴史と文化に対する関心も、決して大きくなく、その関心はジャワの歴史と文化に対するものよりもはるかに小さく、さらにミナンカバウ、バリ、プギスなどといったジャワ島の外の民族集団に対するものよりも小さかった。

これらの事実こそが、スンダの文化の目録となる百科事典を編纂したいという願望を起こさせたのである。スンダの文化に興味をもつ人の参考書として用いられるためだけでなく、スンダ人自身がさらに自らを知り、自らの文化の豊かさを理解するためでもあった。

偶然にも私がこの理念を話したところ、トヨタ財団が助成に関心を示してくれた。私自身もバンドゥンやジャカルタの友人に連絡をとり「スンダ文化百科事典」を編纂したいという旨を話したところ、温かい支援を得ることができた。当初は文化だけに限定したが、計画が進むにつれて、スンダ民族集団に関する記述をより完全に明確にするためにも、文化についてだ

けでなく、スダの自然や人に関するものすべてを掲載すべきだと考えるようになった。このようにして、我々が編纂する「スダ百科事典」はインドネシアのエスニシティについての初めてのものとなった。

百科事典編纂の道程

最初に、私は編集委員会を組織した。私はエディ・S・エカジャティ教授(バンドゥン、パジャジャラン大学)に編集委員長就任を依頼し、アヤトロハエディ教授(ジャカルタ、インドネシア大学)、ドドン・ジワブラジャ氏、コマルディン・サストラディブラ教授(インドネシア教育大学)、アティック・スバンディ氏(バンドゥン芸術高等専門学校)、アブデラフマン氏らに、編集委員になってもらった。まもなくして、ハジ・エンバス・スヘルマン氏、ナノ氏もメンバーに加わった。一方、委員への就任を依頼し、当初は熱意を示し合会にも出席していたてくれていたが、その熱意は続かず、次第に理由もなく遠のいていった人々もいた。

私自身、「インドネシア百科事典」の編纂の経験があるが、ハッサン・シャディリ氏の監修によるもので、私は文学の部分だけの監修をしたにすぎなかった。それゆえ、たびたびインドネシアの様々な百科事典の編纂に携わってきたタウフィック・アブドゥラ教授に顧問就任を依頼することに意見がまとまり、幸いにも、彼はこの依頼を引き受けてくれた。そして、のちに我々の手引となった百科事典編纂に関する技術的指針をも教示してもらった。

私自身は日本在住のために、少なくとも年に2回、2月から3月、そして7月から8月にかけてインドネシアへ赴くこととし

た。インドネシア滞在中は、必要であれば毎日でも集中的に会合を持った。それ以外るときは、編集委員はそれぞれの家で仕事をし、毎週火曜日に会合を開いた。

まず我々が取りかかったことは、文化の様々な分野からの記載事項を集めることであつた。当初は4000項目を5年で仕上げ、つまり1年間で800項目を作成するという予定であつた。しかし、すぐにそれは多すぎることに気がついた。そこで、年間500項目の作成を目標とし、百科事典には2500項目を掲載することにした。しかし、それでさえ達成することは難しく、1年に250項目しか集まらなかったこともあつた。我々は、様々な分野の専門家を招き、我々がすでに作成した項目の記事の執筆と、より重要な項目があればそれを提案してくれるよう依頼した。当初は快い返事をもらったにもかかわらず、実際には送られてくる記事は多くなかつた。また、彼らは執筆に慣れておらず、ましてや百科事典の執筆の経験もなかつたために、全体を書き直すこともたびたびあつた。

第一に困難であつたことは、参考資料を収集することであつた。編集委員の多くはバンドゥン在住で、私自身は日本にいたが、資料はジャカルタの国立図書館や国立公文書館、オランダのレイデン市に位置する王立地理言語民族学研究所(KITLV)の図書館やレイデン大学図書館に所蔵されていた。幸いにも、後にドディ・A・ティスナアミジャヤ図書館と合併することになったパタンジャラ図書館で、多くの雑誌や本のコピーを入手し、利用できた。編集委員達はジャカルタの国立図書館を何度か訪れ、私自身はKITLVの図書館を利用するためにオランダに赴いた。とはいえこれらの図書館においてさえ、入手できない資料が数多

く存在した。当時のスダ人にとって記録することの重要性の認識が低かつたからであろうために、スダ語の出版物はそれらの図書館に届けられなかつた。当時の人々は出版物をグドゥンガジャ博物館付属図書館(現在の国立図書館)に寄贈しなかつたために所蔵されていなかつたのである。出版物を寄贈するという志はインドネシア独立後よりも戦前のほうが高かつたようである。例えば、「シパタフナン」紙は、独立以前のもは全版が国立図書館に収蔵されているが、独立後のものは一部もない。

このようにして、5年という編纂予定は10年にまで延びてしまった。その間、我々は約3500の記載事項を得ることができた。項目執筆を優先したので、執筆がほぼ完成してから初めて校正にとりかかつた。その際、古くからの友人でもあつたハジ・エンバス・スヘルマン氏より予想外の協力を得ることができた。当初彼は会計係であり、まったく執筆を担当していなかつた。しかし、校正をする段階になって、彼は正確で批評もできる読み手であることが分かり、常に修正案を提言してくれた。このことは、我々に彼が豊富な経験と知識をもつ、スダの文化・風俗習慣の情報提供者であることを改めて認識させた。その結果、最終的に彼には編集委員に就任してもらつた。

その他、困難であつたことは、以前はスダ人が日常的に使用していたが現在ではあまり用いられなくなつた物や道具の挿絵を作成することであつた。若い世代のイラストレーターたちはそれらを見たこともなく、まして使つたこともなかつた。バンドゥンにあるスリ・バドゥガ・マハラジャ博物館で見本となるものが一部

にはあったが、そこで得られなかったものも数多くあった。したがって、イラスト作成者は、それらの物の絵を描くためには、情報提供者であるハジ・エンパス・スヘルマン氏やドロン・ジワブラ八氏に説明を求めなければならなかった。しかし、イラストが完成しても訂正すべき箇所があったり、なかには5-6回にもわたる訂正ののち完成したのものもあった。また、スダ百科事典へ掲載には至らなかったものも多くあり、その項目はイラストを載せずに発行した。

事典完成からひろがる世界

当初より、我々はこのスダ百科事典の編纂がこの種のものでは初めてのものになると認識していた。インドネシアの民族に関する百科事典がまだなかったからである。私達はこの活動が、インドネシアの他民族集団が百科事典を編纂するきっかけとなることを願っている。そしてこの百科事典がスダに関心をもつ人々だけでなく、自らの祖先の歴史や文化について十分な知識をもたないようなスダ人にも、情報を提供するものであってほしいと願っている。しかし、スダ百科事典の出版後、我々に寄せられたコメントや反応から、思いも



道具の挿絵：これは kohkol と呼ばれるドラム的一种。竹製の場合は夜警に、木製の場合は礼拝の合図に使用される

よらなかった影響があることが分かった。それは一部のスダ人の間に、自信のようなものが芽生えてきたことである。インドネシアにおいては豪華本に分類される「スダ百科事典」は、とりわけ他に百科事典を持っている民族集団がないという点で、スダ人に誇りを与えた。その一方で、「スダ百科事典」により、彼らは祖先の歴史、文化、風俗習慣、信仰などの説明を得ることによって、自らの民族集団を深く知ることができ、そして自分自身をより一層理解できたと感じたのである。1914年に創設され現在も活動している組織である、パグユパン・パスンダンは、86回目の創設記念日の企画として、2000年10月5日にバンドゥンのサヴォイ・ホーマン・ホテルにて「スダ百科事典」について話し合う討論会を開催した。多くの報道関係者を含む数百人の参加者が集まり、国営テレビのバンドゥン支局は90分番組を放送した。編集者たちはこのような歓迎と反応をまったく予想していなかった。

初めてのスダ民族集団についての目録となった「スダ百科事典」の出版は、絶え間なく続き不可避なものであるグローバル化とインドネシア化に直面している問題を議論する契機となった。これまで、十分な参考資料が存在しなかったゆえに、次々と発生する問題に直面しても、それに対する行動や方策、対策は、「つぎはぎ」のようなもので、問題の解決には至らず、そのうちにまた次の新たな問題が生じるといった状態であった。「スダ百科事典」の出版によって、これらの問題が、より根本的に深く、かつ目的を持って議論されることが期待される。それだからこそ、スダ文化の発展と専門家自身の進歩に有益な意見交換がなされるよう、スダ文化のすべての分野に

わたる専門家達だけでなく、国内外からも、そして芸術家、官僚、教師、文化活動家、ジャーナリスト、学生、スダの名士達も参加するスダ文化国際会議を開催するというアイデアが生まれたのである。

スダ文化国際会議がスダ文化に焦点を当てるものであっても、その成果は、グローバル化の波にさらされ、問題を抱えているインドネシアの他の地方文化に対しても、同様の問題を理解するために有益なものとなる。よりよい認識によつて的確な方策や対策が実施され、これまでの過ちを回避することができるはずである。地方文化の発展に的確な方策や対策がとられることは、インドネシアの国民文化の復興や発展に良い結果をもたらすであろう。なぜなら、地方性は民族主義と対極にあったり相反するものではなく、インドネシアの国民文化を豊かに色鮮やかにするものであり、インドネシア共和国の国章を定めた人々にも認識されていたもの、つまり、多様性を表現するものであるからである。

(原文インドネシア語、翻訳文監修 川崎恵津子)

- (1) 石井米雄監修(1991)『インドネシアの事典』6ページに準拠し、原文中 bangsa と記されたところは「民族」、そのサブグループである suku bangsa は「民族集団」と本文中では翻訳している。
- (2) 前掲書 p.252。オランダ植民地下の1928年10月28日にジャカルタで開催された第二回インドネシア青年会議において採択・承認された誓い。その骨子はインドネシアの青年男女にとって唯一の祖国・民族・言語はインドネシアに他ならないことを誓うものであった。

韓国の研究者を訪ねて

プログラム・オフィサー 本多史朗

筆者は財団へ入団して以来、6年間に亘って、タイ、ラオス、カンボジア、そしてミャンマー(ビルマ)といった、東南アジアの国々のプロジェクトを担当していたが、今年にはいって、研究助成プログラムを見ることとなった。こちらのプログラムでは、むしろ韓国、台湾、中国といった北東アジア諸国の研究者を支援する事が多い。やはり、現地の研究者は、その土地の文脈の中で、お会いして、お話を聞いてみたいという思いが募り、11月26日(日)から、12月1日(金)まで、韓国を訪問し、ソウル、江原道春川、慶尚北道尚州を廻り、そこで研究に携わっている韓国人、日本人の研究者を訪ねた。以下はその記録の一部である。

ソウルに空路入った11月27日(月)の早朝、まだ夜も明けぬうちにソウル東部の国鉄京春線清涼里駅から、春川行きの列車は出発する。11月末のソウルにしては暖かな天気だということだが、しかし、寒い。清涼里駅の周りがある庶民的な食堂からは、闇の中へ湯気が立ち上っている。ソウルを離れて一時間もするうちに、徐々に夜が明けていく。春川へと向かう沿線には、すでに落葉して、裸となった樹木や、刈り入れを終えた田畑がずっと続く。

春川駅からは、翰林大学翰林科学院日本学研究所へと向かう。同研究所所長の池明観先生は、以前「朝鮮近代知識人の民族的自我の形成に関する研究 - 近代日本との出会いを通じた民族的自覚の過程を中心として - 」というプロジェクトのもと

で、1970年代から80年代にかけて、韓国民主化運動の精神的指導者の一人だった咸錫憲氏の若き日の、内村鑑三との出会いを調べられた。筆者は、10年以上前に、当時日本に滞在されていた池明観先生の警咳に接する機会があり、小柄なおからだの全身から放射される気概に強い感銘を受けたことがある。この機会に池先生に再びお目にかかる事を心から楽しみにしていたのだが、池先生は、その日韓関係への長年にわたる献身的な努力が評価され、10月に平成12年度の国際交流基金賞を受賞されて以降、大変多忙な毎日になったようだ。残念なことに、この日お目にかかることはできなかった。対応してくださったのは、研究員の樋口容子さんである。東京女子大学で池先生の下で学んだ後、ソウルに留学し、その後この研究所に招聘されたという。同僚の崔明姫さんと共に「翰林日本学研究」誌の編集、あるいは日本学研究所が関係する国際会議のオーガナイズにも携わっており、きわめて有能な学术コーディネーターという印象を受けた。このような若い研究者が、韓国の研究機関の後方支援役をつとめていると思うと心強い。



林慶澤氏(ソウルにて)

この日は、ソウルに戻った後、国立ソウル大学校比較文化研究所の林慶澤研究員とお目にかかる。この人はソウルの西江大学を卒業した後、ソウル大学校で修士を修め、さらには東京大学大学院で博士号を取得した文化人類学者である。日本に留学中には、千葉県佐原市でフィールドワークに従事した。その折に、土地のやくざ組織に出入りしたり、また地方政治家の選挙参謀も務めたという話の持ち主である。大柄な体躯に、声がよく通る方で、これらの逸話もさもありません。林さんの熱のこもった話の中でも、心に残ったのは、韓国での民族学博物館の必要性である。近年、韓国と中国、ロシア沿海州、モンゴルなどとの政治・経済関係は深まっている。しかし、それらの近隣諸国の文化を視覚的に知るための施設が韓国にはない。林さんは、「物語るのはモノ」という信念の持ち主で、異文化を知るためには実際にその文化を構成するモノを見なければならない、という。遠くない将来に韓国民族学博物館が設立されるとしたら、その動きの中心となるのは、このような人ではないか。日本と同様に単一民族国家として成り立っている韓国が、東アジアの隣人たちの異なる文化をよりよく理解する上で、韓国人類学が果たしうる役割は大きいだろう。

翌日は、漢江の南にある南部バスターミナルから尚州行きのバスに乗る。一時間ほど高速道路を走った後、一般道路に入っていく。後で地図を見ると、どうやら、忠清北道の山間を抜けて、慶尚北道を目指していたらしい。山に囲まれた枯れ野が続く。3時間半後に、尚州のバスターミナルにつくと、板垣竜太さんが出迎えてくれる。板垣さんは、林慶澤さんと同様に、東京大学で文化人類学を修めた後に、

ソウル国立大学に留学し、現在はこの土地で、「韓国村落社会における識字の社会史的研究」というテーマの下で、フィールドワークを行っている。板垣さんが明らかにしようとしていることを筆者が自己流に咀嚼すると以下のような話になる。李氏朝鮮下で19世紀末まで朝鮮地方社会において指導的な役割を果たしていたのは、漢文を通して儒教の教養を独占的に習得した、在地の読書階級である両班(ヤンバン)である。しかし、欧米列強と日本からの開国と植民地化の圧力にさらされる19世紀後半からの朝鮮社会の混乱と変化の流れの中で、漢文、儒教、そして両班層の地位は低下していく。とりわけ、日本植民地下の日本語の普及が、この流れを加速した。李氏朝鮮時代に約6世紀に亘って、儒教と漢文を中心に組織されてきた朝鮮の地方社会にとって、この変化がどれほど大きな衝撃であったかは容易に想像がつく。板垣さんは、オーソドックスな文化人類学的手法から大



板垣竜太氏(尚州にて)

胆に踏み出して、さまざまな歴史資料を収集しながら、このプロセスを克明に描き出そうと試みている。尚州の名族両班の末裔が経営する食堂で、大蒜を肴に焼酎を飲みながら、板垣さんのお話を伺っていると、果たして板垣さんが文化人類学者なのか歴史家なのか、よくわからなくなってきた。しかし、このように諸学の境目が低くなる現象こそが、近年の学問の先端におきている変化の大きな特徴なのだろう。板垣さんのような若い研究者が、10年後に自らをどう規定するのか、酔いのぐるぐる廻る頭で興味がわく。翌朝、板垣さんの奥様の手料理でもてなされた後、尚州の史跡を案内してもらい、その後、ソウル行き的高速バスに乗り込む。

なお、脇にそれる。尚州ではもう一人忘れられない方に出会った。板垣さんと共に尚州の書院、書堂 - 儒学の教育機関 - の何たるかを、実地にお話くださった趙益衍先生である。板垣さんのお話によれば、この方は、やはり尚州の名門豊壤趙氏の末裔である。一樵という雅号をお持ちながら、明晰な記憶力と、風韻にとんだ温厚なお人柄の持ち主で、儒教によって心を耕したかつての両班の片鱗をうかがったような思いがする。趙先生の書もまた見事なものだった。

ソウルに戻った翌日の11月30日(木)には、永登浦区汝矣島にある国会議事堂に併設されている国会図書館で研究官を務める裴民植さんを訪ねる。ところが国会議事堂の前には、機動隊が待機している。今回ソウルの街を歩いていると、重装備の機動隊をいくつもの街角で見かけた。話を聞くと、どうやら筆者の訪韓直前に倒産した大宇自動車の労働争議などをきつ



裴民植氏(国会図書館にて)

けに、労働運動が活発になっているらしかった。一旦は1997年の経済危機を乗り越えたかに見えた韓国経済だが、ここ数ヶ月の間にまた経済状況が急速に悪化し、それと共に労働争議も頻発しているという。韓国の労働問題の切実さに思いをはせる。もっとも機動隊のバスを、街のおじさん、おばさんの屋台が取り囲み、機動隊員に出前を届けている。このあたり、ほほえましい。

裴さんは、本来は農業経済学者である。ソウルの高麗大学で学んだ後に、東京大学へ留学し、農業経済学の博士号を取得された。しかし、研究を進めるうちに、韓国では日帝36年と呼ぶ、日本植民地期研究に関する基礎的な資料が不足している事を痛感するようになったという。そこにおきたのが、1997年の経済危機である。国際通貨基金の構造調整政策のあおりでの、裴さんも危うくリストラされかけた。そこで、腹をくくった裴さんは、「どうせ首になるのなら、好きな事をやってやれ。」と1999年度のトヨタ財団研究助成に、朝鮮総督府や朝鮮銀行など、植民地の支配機構の組織とその変遷や主な植民地官僚の目録を作成するための申請書を送ったという。それが見事に受理されて、助成が決

定したため、かえって裴さんのほうが驚いた。しかも幸いな事に、リストラも実施されずに、国会図書館で研究を続ける事ができた。研究の内容をうかがっていると、これはものすごい仕事である。朝鮮総督府が36年間に発行した膨大な量の官報を読み直し、そこに公布されている高級官僚の任免や、組織の新設・改組などをしらみつぶしにコンピューターに入力しているのだ。しかも、官報それ自体にも記載のめれがあるので、いずれは日本に残っている旧内務省の記録とクロスチェックしなければならないという。歴史研究に対するよほどの情熱がないとできない仕事である。いずれ、公刊に辿りついたら、朝鮮半島の植民地研究にとって一つの時代を画するような資料集になるのではないか。このような地道な資料整備の暁に、朝鮮半島での日本植民地支配の実態が、実証的に明らかになっていくものと思う。裴民植さんは、同様に台湾での日本植民地支配にも強い関心をもっており、いずれは台湾の研究者と日本植民地統治を比較するための話し合いの場を持つことができると考えている。人類学者の林慶澤さんも熱っぽく語っていたが、北東アジアでは、日本による植民地化と共に近代が訪れた。この問題、-歪んだ近代化といっ



旧朝鮮総督府官報(復刻版)

てもいい - をどう考えるか、韓国の研究者にとっては深い関心事のように感じられた。いずれは、韓国、台湾、琉球、樺太などの研究者が、実証的なデータを持ち寄って、日本植民地支配がもたらした近代の到来が意味するものを議論する日がくればと思う。これは、私たちにとっても、目をそらす事のできない問題である。

最後にお目にかかった女性社会学者の金英さんも強烈な印象を残した。原州の尚志大学で教鞭をとる金さんは、1980年代の半ばにソウル大学国史学科で学んでいた頃は、学生運動の熱い闘士だったという。学部時代に国史学科を選んだのも、そこがもっとも戦闘的な雰囲気をもっていたからという人柄である。彩り豊かなファッションをしている事もあり、燃え上がるような情熱を感じる。当時の全斗煥政権は学生運動に対しても厳しい弾圧を行い、金さんのごく近い同志の一人も、警察に逮捕され、拷問を加えられた挙句、殺されたことがあったと話してくれた。このような経験を経て学問の道に入ってきた人だけに、日本の社会科学の学風に対しても、客観性や実証性、体系性、精密さといったものを重んじるあまり、社会の具体的な問題の解決に参画する気風が弱い、という疑問を率直にぶつけられた。まだ、労働問題が切実なものである韓国社会の中では、金さんが考えるような実践の学としての社会科学という発想には正統な裏付けがある。また、筆者も、金さんが日本の学風について指摘した点は、聞くべき事が大きいと思う。民間の財団としては、学問のための学問ではなく、社会の現実と研究者の切迫した葛藤の中から生まれてくる発想を励ますべきだと、あらためて考えさせられた。しかも、そのような動きが在野から起きてくるのなら、一層支援する意味は深いだろう。東京

大学に客員研究員として在籍していたときに金英さんが取り組み、そしてトヨタ財団がお手伝いしたのは、日韓両国を視野に収めての女性パートタイム労働の研究だった。

短い期間であったが、これまでなじみの薄かった韓国の研究者に実地でお目にかかり、その話を伺う機会を得たのは、筆者にとっても益することが多かった。とりわけ、感じ入ったのは、林慶澤さん、裴民植さん、金英さんが抱える問題意識のスケールの大きさである。これは、彼らの知的な関心が、現実の韓国社会の動きに密着している事実と切り離せない。韓国が日本の植民地支配を脱して、自らの国づくりをはじめてから、まだ僅々半世紀しか過ぎていない。国づくりのために知識人としての研究者が取り組むべき課題はまだ多い。しかも、1997年の経済危機の余波はいまだ残り、目を前に向ければ朝鮮半島の統一という、未来の課題がある。このような知的環境の中で、彼らが、社会の現実に参加するのはむしろあたりまえだろう。翻って、このような実践的な関心に裏打ちされた韓国人研究者の存在は、隣国の私たちにとってもこの上ない刺激になるのではないか。これからは彼らが語ってくれた事の意味についての考えを深めてみたい。

トヨタ財団を歴史として見る

シニア・プログラム・オフィサー
久須美雅昭

トヨタ財団が設立されたのは1974年10月だから、1999年度が設立25周年という節目であった。2001年の新千年紀とも重ねて、トヨタ財団の25年の活動を歴史として位置づけ、超長期の未来展望の中で財団の役割を考えてみてはどうか、ということこれまで多少の試行錯誤を行ってきた。ここで、過去の周年事業の経緯とも併せて報告しておきたい。

記念事業と年史

一般に周年の節目は、通常の事業予算ではやりにくい大型の企画を特別予算の下に実施するための契機となる。トヨタ財団ではかつて5周年記念として、アジアの子ども劇場 - 東南アジア児童劇団の公演と会議、明治・大正・昭和の建築遺産 - 全国巡回報告会、「身近な環境をみつめよう」研究コンクールの3つの事業を実施した。はそれまでの財団の助成の経験を活かす形で、また は新規プログラムの試行として企画された。後にこの研究コンクールは18年にわたり継続実施されることとなる。

また、10周年にあたっては欧米の財団専門家なども招き、民間助成財団の役割をめぐり国際シンポジウムを主催した。このシンポの記録は東洋経済新報社より「これからの民間助成財団」として刊行されている。さらに10周年記念特別助成として「マレーシア図書館パイロット・プロジェクト」など3件、合計4千万円の大型助成を行った。

20周年においては「21世紀アジア太平洋の文化の課題 - 国際文化協力を考える

」と題する国際シンポジウムを3日間にわたり東京で開催した。これに先立ち、タイ、ヴェトナムで連続して文化の課題をめぐりシンポジウムを実施している。さらに、ヴェトナムの古代王朝「チャンパ王国の遺跡と文化展」を名古屋、福岡、広島、東京、大阪の各地で開催した。

これまでの周年記念事業はいずれも日常のルーチンを超えた、比喩的に言えば「祭り」のような意味合いがあったといえる。とくに5周年、10周年の頃は高金利の時代で、企画に合わせ特別予算を編成する余裕もまだ十分にあった。しかし、25周年の時点は、財政的な厳しさも、もうひとつ、直前の20周年事業でかなりエネルギーを使ったのでしばし充電したいという気持ちも手伝って、記念事業の企画はあえて立てなかった。

一方、年史については、10周年にあたって「トヨタ財団10年の歩み」と題する10年史を刊行している。25年の節目では、この10年史以後の記録をどうするかが大きな課題となった。とりわけ四半世紀という歳月は十分に歴史としての考察に値する長さである。そこで、トヨタ財団の活動を歴史として位置づけてみてはどうか、そのためには何をすべきかという考えが出てきた。

歴史化の基礎作業

財団では90年代後半からデータベースの整備が進み、5千4百件余の過去の助成案件はその概要まで全て日・英両語で収録され、WEBサイトで公開されている。また、詳細な年表もWEBから参照できるよう

になっている。10年史の中ではこうした公開資料の再録に半分以上の紙幅が割かれていたが、少なくとも公開資料集としての25年史を刊行すべき必要性は今では乏しい。

外部の歴史家がトヨタ財団の歴史を書くという可能性を想定してみると、むしろ、財団の意思決定過程に関わる内部の記録文書 - 例えば選考委員会の議事録や、財団の内部会議の資料など - が重要な意味を持って来る。実は、トヨタ財団では今までこうした内部文書の保存と整理にはあまり意を用いてこなかった。これに気づいたのは、プログラム・オフィサーの牧田から、博士論文の一環としてフォード財団のアーカイブを活用した経験を聞いたからである。そこで、内部文書の長期保存と将来的な公開に向けてアーカイブ整備をまず第一歩目の目標として、歴史化のための基礎作業を始めてみた。

この過程で財団設立初期の文書もいくつか整理したが、当時は湿式コピーなども用いられており、既に文面の判読が難しいほどに劣化していることがわかった。乾式コピーでも用紙もろとも劣化が進んでいる。一応現物は整理保管したが、早期に肉眼で判読して翻刻しておく必要がある。

また、設立初期の関係者に対するオーラルヒストリーの収集も、一部試みた。しかし、実感としては10年史で固定した史実を覆すような話にはならないように思われる。むしろ、ニューズレターや年報などにオフィサーがその時々を思いを記述してきた中から、財団の思想的なものを組み立てるほうが先決かもしれないと思い、目下その記載内容の整理に取り組んでいる。これが済めば、会議録などに残る手書きメモなども裏付け資料としての意味がはっきりしてくるであろう。

プロジェクト評価との関わり

いったん財団活動を歴史として記述してみようと思いつくと、当然ながら、過去に助成した個々のプロジェクトを歴史的視点から捉え直してみたいという気になってくる。筆者の場合、1999年秋に中国に長期出張し、そこでかつての日中共同研究の相手国側から見たその後の展開を見聞したことも大きかった。つまり、日本側の記述では完結したと思っていたプロジェクトに、中国側では全く別のストーリーを読むことができると気づいたのである。さらにそこから、プロジェクトを評価するには、実は錯綜したストーリーを歴史的な記述として描く以外に方法はないのではないかと考えるに至った。

助成プロジェクトの評価ということは助成財団にとってのいわば永遠の命題であり、これまでもいろいろな評価の試みが行われている。しかし、概して社会学的な手法によるある時点での横断的な記述には説得力を感じたことがない。それは要するに、紆余曲折を伴う複雑なストーリーを勧善懲悪の漫画に置き換えているようなものだからであろう。

果たしてうまく行くかどうかはまだわからないが、歴史記述の手法にもとづく助成プロジェクトの評価ということも、25年の歴史を持つ財団として提案できればと考えている。

もうひとつ、財団のプログラムの展開は、畢竟、プログラム・オフィサーの思考回路の形成過程 - あえて思想とまでは呼ばないが - と相互に深く関わっている。トヨタ財団の役割として、プログラム・オフィサーというものを対象化して記述することも意味があるのではなからうか。

新刊紹介

ヤマネって知ってる？

ヤマネおもしろ観察記

湊秋作著
築地書館刊

00年10.16 四六判 128頁 ¥1,500
ISBN4-8067-1213-2

森のスケーターヤマネ

湊秋作著 金尾恵子絵
文研出版刊

00年9.30 B5変形判 80頁 ¥1,200
ISBN4-580-81274-3

体長8cm、体重18グラム、黒い大きな瞳の愛らしい動物ニホンヤマネを知っている人は、どれだけいるだろうか？ ヒトが日本列島に住み始めるよりずっと前からこの島の森に暮らすヤマネ。国指定の天然記念物である。

湊秋作氏は、1973年、大学在学中にヤマネの研究をはじめ、卒業後は、和歌山県の小学校で教鞭をとりながら30年近くにわたってヤマネの研究を行ってきた。87年には、当財団の研究助成により「天然記念物ニホンヤマネの保護のための生存条件の研究とそれによる森林保全への応用および自然保護教育への教材化」というプロジェクトを実施した。現在は、清里にあるキープ協会やまねミュージアムの館長として、ヤマネの調査を続ける一方その保護やヤマネを使った環境教育に力を注いでいる。

『ヤマネって知ってる？ ヤマネおもしろ観察記』は、ヤマネに魅せられ、惚れこみ、翻弄される湊氏によるヤマネとヤマネを取巻く環境の克明な記録である。随所にちりばめられた愛らしいヤマネの写真と著者のユーモアあふれる文章で読者は、楽しみながらもその生態や特徴を知ることができる。本書では、長い「ヤマネの不思議な物語」を調べる研究の旅」で明らかになった「ヤマネ語」やその「冬眠戦略」、世

界のヤマネ、そしてヤマネの保護をめぐる様々な試みが紹介されている。

もう一冊の『森のスケーターヤマネ』は、同じ著者による児童向けの本である。児童向けの平易な文体で書かれてはいるが、ヤマネの一年の生活を知るに十分な内容になっており、幅広い世代が読むことが出来る一冊である。(R.K.)



住まいから見た社会史 シンガポール 1819 ~ 1939

N. エドワーズ著 泉田英雄訳
日本経済評論社刊
00年10.16 328頁 ¥4,800
ISBN4-8188-1302-8

本書は、1980年代にシンガポール国立大学建築学部で教鞭をとっていたイギリス人建築家の手によって書かれた、イギリス植民地が開かれた時から第二次世界大戦までに建設された、シンガポールの一戸建て住宅の発展史である。イギリスの産業革命によって生み出された都市の中産階級は、人口が過密で劣悪な衛生状態にある都市を脱出し、家庭生活と余暇を満喫する「田園都市」を求めようになった。このような新しい価値観に突き

動かされた人々は、やがて植民地官吏としてインドに赴任すると、地方の民家の様式を取り入れながら、天井が高く風通しのよいバンガローを郊外に建設していった。

ラッフルズによる植民国家の建設は、このような背景のもとに、ヨーロッパの当時流行の建築様式と、19世紀初頭の英領インドの居住様式の2つのモデルに基づいて都市計画を練り上げていった。ヨーロッパとアジアの強い影響を受け、熱帯の気候に適合した独特のコロニアル・スタイルのこれらの住宅の住民たちは、イギリス人の植民地エリートや華人などの商業エリートたちであった。

本書のユニークな点は、これが単なるシンガポールの高級住宅の建築史にとどまらず、題名が示すとおり、住宅を通じて当時の人々の生活を再構成し、それをシンガポールの社会文化的な変化の中で位置付けている点である。一戸建て住宅の建築様式や間取りを通じてイギリス人、華人、マレー人の家族関係や余暇の過ごし方、祖先崇拜といった慣習が家庭生活の中でどのように営まれたかを明らかにしており、大変興味深い。例えば、マラッカ海峡沿岸で生まれた海峡華人たちは、子弟にピアノを習わせ、中国の音楽には関心を示さず、クロンチョンやドンダン・サヤンのような音楽を好んだこと。また、インド人、マレー人、アラブ人、華人、ヨーロッパ人の

どの民族においても、家父長制的な男女関係に基づいて間取りが決定されているが、海峡華人の祖母



に関しては逆に絶大な権力が与えられていたことなど、当時の様々な民族の価値観や生活様式を知るための優れたエピソードが多数盛り込まれている。

写真や図面も豊富で、19世紀や20世紀初頭のシンガポールとそこに生きる人々の暮らしを伝えており、建築以外の専門の人でも楽しめる内容となっている。記者あとがきにもあるように、植民地支配に関してややノスタルジックな点は気になるが、20世紀初頭には48の民族が暮らし、54の言語、方言が話されていたというコスモポリタンな都市、シンガポール社会の「来し方」を見事に再現している。(R.O)

チョイトンノ伝1 - クリシュナ信仰の教祖

K. コヴィラージュ著 頓宮 勝訳注
平凡社刊 東洋文庫680
00年11.9 全書版 408頁 ¥3,000
ISBN4-582-80680-5

インド哲学の6つの学派のうち現在に至るまで思想的に影響力を持っているヴェーダーンタ学派の支流の中で、異彩を放っているのがチョイトンノを創始者とするヒンドゥー教ヴィシュヌ派の教団であるベンガル・ヴァイシュナヴァである。本書は、16世紀後半、インドのベンガル地方(当時はガウダと呼ばれ、現在のオリッサ州やパングラデシュを含む)を中心に、南インドから北インドにかけて大きな影響を与えた宗教改革者チョイトンノの生涯を詩の形式で描いたものである。

紀元前から北インドの民衆の間ではクリシュナ(=ヴィシュヌ)伝説が語り伝えられてきた。11世紀末に南インドのカルナータカ地方から移住してきたセーナ朝はヴァイシュナヴァ(ヴィシュヌ派の人々)を保護し、宮廷詩人や学者たちがクリシュナに関する多くの詩や文学を残している。しかし、13世紀になるとイスラ

ム勢力の侵略により、セーナ朝は弱体化し、その文化的な伝統は継承されることはなかった。チョイトンノが登場した時代は、イスラーム王朝支配下でのヒンドゥーの人々によるクリシュナ信仰の広がりが見られた時代であり、人々が宗教改革者を求めていた時代であった。

本伝記はチョイトンノの誕生から死までを素材としてクリシュナ崇拝の教義を民衆にわかりやすく伝える形で書かれている。全体は大きく3つの部分に分けられており、誕生から修行者になるまでの初期、6年間の巡礼を描いた中期、及びブリーで過ごした晩年の18年間を記した晩期からなっている。本書は16世紀以降のヴィシュヌ派宗教運動の展開を理解する上で重要なテキストであり、哲学、神学、文学を含んだ抒情豊かな韻文はインド中世の秀逸な文学作品の一つとして数えられている。(R.O.)

住民が見た瀬戸内海:海をわれわれの手に

環瀬戸内海会議編
技術と人間刊
00年11.24 A5判 210頁 ¥2,000
ISBN4-7645-0130-9

1973年に成立した瀬戸内法(瀬戸内海環境保全特別措置法)第二章「瀬戸内海の環境の保全に関する計画」第三条は、「瀬戸内海がわが国のみならず、世界においても比類のない美しさを誇る景勝地として、また国民にとって貴重な漁業資源の宝庫として、その恵沢を国民がひとしく享受し、後代の国民に継承すべき」とうたっている。

しかし、制定後四半世紀以上が経過した今日、瀬戸内海地域の環境は悪化し続けている。汚染の原因としては、陸地の汚染、家庭排水が処理されないまま川に流れ、結果瀬戸内海に流れ込んでいること、首都圏から持ち込まれた産業廃棄物の埋め立てか

ら流出する化学物質、リゾートブームによるゴルフ場などの乱開発等、いろいろ考えられる。

本書の執筆団体である環瀬戸内海会議は、瀬戸内海の再生を目指し沿岸11府県の住民が集い、1990年6月に結成された。ゴルフ場やリゾートブームによる乱開発を阻止すべく、沿岸住民が集結し「立木トラスト」運動(豊島「未来の森」をつくらう運動等)により、多くのゴルフ場計画をストップさせてきた。

本書は、沿岸各地で環境保護の運動を続けている執筆者17名による報告から構成されており、1998年に当会議が環境庁の審議会に向けて急遽提出した35のレポートからなる報告書「住民のみた瀬戸内海」がもと

となつて

いる。なお、当出版に際しては、1998年度市民活動助成が行われた。(K.T.)



渴き

イワン・シマトゥパン著
柏村 彰夫訳
めこん刊
00年12.15 A5判 231頁 ¥2,000
ISBN4-8396-0141-0

著者であるイワン・シマトゥパンは1928年スマトラ島の港町シボルガ生まれのバタック人である。彼は東ジャワのスラバヤ医学学校に入学するが、実習の際に失神し、血を見るのに耐えられなくなり中退。その後オランダ、フランスに留学し、人類学、演劇、哲学を学ぶ。その間オランダ人女性と結婚し二男をもうけるが、妻は病死。インドネシア帰国後再婚するも離婚。

その後、ホテル住まいをしていたが経済的理由により断念。最後は薬代にも事欠くほどの困窮状態に陥り1970年に42歳の若さで生涯を終えている。

本書は元ゲリラであり、大学を退学し、自発的に移民となった主人公が、異常なほどに長引く旱魃を機に移民村を捨て、「前進」する過程で経験するさまざまな出来事を通じて、人間のもつトラウマ、疎外、生の不条理 著者自身が強く感じていたであろうものをユーモアを織り交ぜつつ、さまざまな反フォーマル・リアリズムの手法で描写した作品である。登場人物はすべて名前をもたず、主人公ですら「男」と表現され、「ずんぐり」、「顎鬚」などの身体的特徴や「神父」、「移住局の役人」などの役職で呼ばれており、さらに地名もなく、日時も特定できないという抽象性のなかで、物語は展開されている。

このようにイワンの著作は、従来の観点からみると小説らしからぬ手法を用いている等、さまざまな批判を受けた。しかし、60年代の終りから70年代にかけてのインドネシアでの社会・政治的な混乱の中で起こった、従来のリアリズム文学の慣習を問い直すという革新運動のなかで、イワンはその旗手とみなされるようになった。そして、彼の死後、独特のスタイルを持った小説として次第に受け入れられるようになった。

難解な抽象的表現が数多くあるにもかかわらず、淀みのない翻訳に仕上がったのは

訳者の柏村彰夫氏の力量と10年にもわたる根気強い翻訳作業によるところが大きいと思われる。(E.K)



内分泌かく乱物質の生体影響に関する国際ワークショップ 横浜 '99 (報告書)

EED国際ワークショップ
横浜実行委員会 発行
00,12 A4版 348頁 ¥4,000

1999年12月13、14日にアメリカ、イギリス、デンマークから11名の研究者を招き、日本も含め、いわゆる環境ホルモンと呼ばれる化学物質の生体影響をめぐる世界の最先端の研究が報告された。この報告会の様子は本レポートNo.90でオーガナイザーの一人である森千里教授に既に詳しく紹介いただいた。

本報告書はこの時の17本の発表を質疑応答とともに日・英両語で再現したものである。語り言葉をうまく生かして素人にも分かりやすい。入手については、横浜市立大学理学部環境ホルモンプロジェクト(TEL:045-787-2016 FAX:045-787-2370 e-mail:bunri1@yokohama-cu.ac.jp)まで。

海を売った人びと - 韓国・始華干拓事業 -

ハン・ギョング、パク・スンヨン
チュ・ジョンテク、ホン・ソンフブ著
山下 亮訳
日本湿地ネットワーク刊
南方新社発売
01年2.2 B6判 305頁 ¥1,900
ISBN4-931376-43-6

韓国・始華(シファ)地区は、ソウルから西南に約35Km離れたところに位置しており、周辺には仁川、水原、安養などの都市が隣接している。行政区画は、京畿道始興市、華城郡、および安山市にわたる地域である。同地域における干拓事業は、1960年代から検討が行われ、結果、87年6月から韓国水資源公社によって事業が進められ、94年1月に堤防閉切り工事が完了した。しかし、干拓によってできた始華湖(調整池)の水質はその後急速に悪化

し、陸海双方に多大な被害をもたらすようになったため、政府により干拓堤防の水門が開放されることとなった。それでも、水質の悪化はもとより、堤防の不等沈下も止まらない状況となっている。



このような事態を憂慮した韓国の農民、N G O、研究者による共同研究「始華湖造成の社会・文化的影響に関する研究」が96年12月より丸一年間実施された。その報告書を広く一般読者に供する形に加筆・修正して出版されたのが『始華湖 - 人々はどうなったか - 文化人類学者たちの現場報告』であり、韓国国内では98年のベストセラーの一つとなった。そして、同書を当財団の市民活動助成により日本語に翻訳・編集したものが本書である。この始華干拓事業の正確な情報が早い段階で日本へもたらされていれば、諫早湾（長崎県）干拓事業にも大きな影響を及ぼしたものと推察される。

主な内容は以下のとおり。

- 序文 始華湖、詐欺師なき巨大な詐欺
- 第一章 始華湖、巨大な問題の始まり
- 第二章 暮らしは壊れて
 - オ島とヒョン島、住民たちの苦痛
- 第三章 ブドウに希望を託した背景
 - マサンが住民たちの夢と怒り
- 第四章 過去の記憶と現在の暮らし
 - チファ二里住民たちの経験

第五章 結論にかえて

- 始華湖造成事業の問題点と課題

なお、本書の末尾には、諫早湾干拓事業の見直しと干拓堤防水門の早期開放を訴えつづけて昨夏逝去された故・山下弘文氏による絶筆「諫早湾干拓事業の現状」も収められている。(G.W.)

2000年度 市民活動助成 応募結果について

本年度の市民活動助成への応募については、2000年10月1日より11月20日(昨年は11月30日)までの公募の結果、487件の応募が寄せられた。

応募件数は、過去最多の件数(545件)となった昨年には及ばないが、それに次いで多い件数となった。こうした近年の応募数の増加は、特に1998年12月より施行された特定非営利活動促進法(N P O法)による影響が大きいものと考えられる。ちなみに、N P O法人格を取得した団体からの応募件数が199件(昨年度は110件)と全体の4割もあった。応募団体の活動年数で見ると5年以下というのが合計229件と全体の67%をしめ比較的新しい団体からの応募が目立っている。

また、財団のWEBサイトへのアクセス数も毎月増加しているが、このようなインターネットの普及も反映してか、東北、山陰、四国をはじめ、地方において応募件数が増加している。

なお、応募テーマについては、「社会福祉」、「子ども・教育」、「環境、エコロジー」が昨年度同様多かったが、中でも「子ども・教育」に関わる応募増がめだった。

今後、これら応募計画について、選考委員による評価・選考を経て、3月の理事会で助成対象が決定する運びとなっている。

(田中記)

* 応募時点でN P O法人申請中のもも含めると計239件、応募総数の49%となる。

編集後記

アイップ・ロシディ先生には、大きなプロジェクトの完成という、新世紀のトップに相応しい記事を寄稿いただき感謝します。財団がプロジェクトに助成を開始したのは1990年。10年がかりの成果です。

近刊紹介で取り上げたヤマネについての2冊の本には、著者の湊さんからの手紙が添えられていました。その中に「今から14年前にいただいた助成で、あの時やっとカッパを買いました。それは、今も恩義を忘れないようにと大切に使っています。」と有り難いお言葉。

1990年代前半に助成を行ったプロジェクトの成果のいくつか、タイ、オーストラリア、日本の各地で高い評価を受け、学術賞を受賞いたしました。以下、簡単に列挙します。チェンマイ大学サラサワディ・オンサクーン助教授は、タイ国立調査研究評議会優秀研究賞(哲学部門)、国際基督教大学岩淵功一助教授は、豪州アジア学会会長最優秀博士論文賞、そして柘植あづみ助教授(明治学院大学)は、山川菊栄賞です。それぞれ10年近い長い歳月をかけて、良質のお仕事をされたのがこのような形で報われて、私たちの喜びもひとしおです。



トヨタ財団レポート No.94

このレポートを継続してご希望の方、また住所等の変更がございましたらお葉書にて財団までお知らせ下さい。

発行日 2001年1月25日
 発行所 財団法人 トヨタ財団
 発行人 黒川千万喜
 編集人 久須美雅昭
 印刷 真友工芸株式会社